

新の国 企業探訪

株式会社ソルテラホールディングス

株式会社ソルテラホールディングスは、産業廃棄物のリサイクルを手掛ける株式会社太陽油化を中心にグループ企業9社+社内ベンチャー1社で構成している。祖業の廃油のリサイクル、汚泥処理をはじめ、バイオマス燃料の開発、バクテリア活性剤の海外展開など、世界的に脱炭素社会への取組みが加速する中で、業界に先駆けて循環型社会形成に貢献する事業モデルの構築に取り組んでいる。

廃油の回収業者として事業をスタートする

株式会社ソルテラホールディングスは、2020年1月、グループ企業を統括するためにホールディングス制に移行した統轄会社である。社名のソルテラは、「太陽」(SOL)と「地球」(TERRA)を意味し、太陽と地球が創り出した環境と共生できる持続可能な資源循環を創造するというメッセージが込められている。その事業の源は1963年7月、グループを統括する石田太平社長の父、石田正夫氏が板橋区内で廃油回収業を始めたことに遡る。

石田正夫氏は10代の頃から自動車整備業務やタクシー運転手など様々な職業を経験した後、27歳で起業した。起業から7年目の1970年9月には

有限会社太陽油化として法人化し、同社がグループの発祥企業となっている。以来、太陽油化は企業から排出される廃油(潤滑油)や汚泥を引き受け、リサイクル処理して再販売するビジネスを50年にわたり手掛けてきた。

起業当初は自動車整備工場や米軍基地などから出る廃油を集めて、手作業による濾過や油水分離処理後、銭湯や養豚場などに燃料として販売していたが、現在は回収した廃油を超高速遠心分離機などの機械処理により異物や不純物を取り除き、高品質の再生重油として精製して、石灰メーカー、製紙メーカーやセメントメーカー、大手製造メーカーなどに販売している。



創業当時(1960年代)の板橋区工場の様子

再生重油は、A重油の代替燃料として産業界では幅広く使用されているリサイクルエネルギーだが、一度使い終わった潤滑油を再利用するために環境負荷が低く、利用者が二酸化炭素（CO₂）の排出量を削減できるメリットがある。持続可能な資源循環を創造する社名になぞられたビジネスであり、太陽油化はこの取組みを広くアピールするため、2019年に「再生重油」から環境保全や社会貢献を意味する「エシカル重油」という名称に改めた。同社の商品を使うとSDGsに貢献という付加価値を企業として得られるという効果も睨んだ戦略である。

汚泥から生まれたバクテリア活性剤「東京8」

太陽油化が廃油リサイクルと並んで、事業の柱として取組んでいるのが有機性汚泥のリサイクルである。これは、レストランやビルなどの排水施設に貯まる「ビルピット汚泥」と言われる廃棄物をバクテリアの働きを利用して微生物分解処理するものである。

かつてそれらの廃棄物は海洋投棄されていたが、1989年に国際法で投棄に対して禁止気運が高まり、この法規制を契機に汚泥処理事業を手掛けるようになった。同年に汚泥処理施設を建設し、その後、東京都の一般廃棄物処理委託事業にも参画した。汚泥をバクテリアで微生物分解処理し残りカスを脱水し、残渣（脱水ケーキ）を肥料の原料やセメント原料として外部委託をしている。

しかし近年、技術革新により残渣もリサイクルし、製品化を目指している。その過程で生まれた社内ベンチャーが「東京バクテリアラボ」だ。これは長年の汚泥処理の研究で培ったノウハウと、環境問題解決やアップサイクルという企業理念を掲げ、バクテリアが持つ可能性に着眼したプロジェクトで、「農業」「工業」「健康」の3つのカテゴリーごとにオリジナル商品の開発に取り組んでいる。その1つが農業分野向けに開発した微生物活性剤「東京8」だ。この商品はバクテリアの力により野菜が育つ土壌の活性化により有効的な働きを持つもので、長年の研究を経て、独自に開発した微生物活性剤である。

「東京8」は、板橋区が区内中小企業の優れた新製品、新技術を表彰する「板橋製品技術大賞



都内でも希少な廃液処理に特化した事業を展開

2019」にも選ばれるなど高い評価を得ている。

一方、工業の分野では汚泥処理残渣物を独自の処理方法により固形燃料化して販売する計画を進めている。一般的にバイオマス燃料と呼ばれるグリーンエネルギーで、同社は既に開発に目途を付けており今春の商品化を予定している。

農業の6次産業化を目指す

太陽油化は「東京8」の商品化計画に伴い、新たに「ソルテラ農園」の名称で農業法人を立ち上げた。その狙いについて石田社長は「単に活性剤を売る会社ではなく、循環型社会形成をテーマに“コト”を売りたい。有機性廃棄物から生まれた「東京8」でエコな野菜を育て、その野菜を使ったレストランや食品加工工場から出た食材の廃棄物がまた当社に集まり、その廃棄物をリサイクルして再び「東京8」が製造されるという“サーキュラー・エコノミー・パッケージ（循環型事業企画）”を作り上げ、更にそのノウハウをフランチャイズ化し全国や世界に届けたい」と抱負を語る。

すでに「東京バクテリアラボ」ではそのプロジェクトが実現段階に



バクテリア活性剤「東京8」※

※東京で製造された微生物には無限（∞）の可能性があると
いう所に着想し、∞を縦にして「東京8」と名付けた。



ある。同社は「東京 8」事業を海外展開しようとフランチャイズ本部を今春立ち上げ、(東京の本社で製造した「東京 8」の原液を海外へ輸出して、フランチャイジーが現地で原液を培養して販売するというビジネスモデルを計画している。第 1 弾として、2022 年初頭にアフリカの 5 カ国からスタートする予定だ。現地での製造は家畜の糞尿やトイレ排水なども利用でき、下水設備がなく今まで川に垂れ流し汚染させていたモノを原料化することで、環境問題解決にも寄与できる。今後、世界各地にフランチャイジーが誕生し、「東京 8」の力によって痩せた土地が蘇り、雇用が生まれ、貧しい人々が豊かになり、環境問題にも貢献できる大義をいだき事業を進めている。



ドラム缶を運ぶ作業スタッフ

都内 23 区で唯一の廃液に特化した産業廃棄物処理事業者

このようにソルテラホールディングスの特徴は、グループに廃液処理に特化した太陽油化を持っていることだ。東京 23 区内に産業廃棄物処理事業者は数多いが、液体に特化した同業他社はごく僅かでそれが同社にとってビジネス上の強みになっている。

産業廃棄物処理業に市場参入するには各自治体の厳しい審査があり、住民の同意なども不可欠である。加えて、液体の産業廃棄物処理には大型のタンクや遠心分離器、脱水機、ボイラーなど様々な装置や設備、それらの設置許可を要する特別な用地、消防署などの関係公共機関の許可、液体廃棄物回収のための特殊車両も必要になる。都内 23 区でこれらの条件をすべてクリアして認可を受け、市場参入することは容易ではない。

連邦・多角化経営を目指す

新規事業開発や既存事業の掛け合わせ、そして M&A などを通じて、事業数や会社数を増やし事業の多角化を進めていく経営戦略を取っている。気になるのが経営管理だ。オーナーでもある石田社長が

1人で多数社の経営を管理することは難しい。そこで同社が選択したのが“連邦・多角化経営”と呼ぶ経営手法だ。先ず2014年頃に、グループ全体を管理する機能として、経営企画室という部署を設立した。同室は会社を運営することに特化した組織で、メンバーは各分野の専門家で構成し、グループ各社各事業を中央集約的に経営する。それにより事業や会社が増えても、合理的かつスピーディーに成長させられる。石田社長の経営理念は“相乗効果”。「経営は効率化が1つの価値ポイントだと考えている。各社にプロフェッショナルな経営者を配置しなくても、経営のサポートグループと経営候補者がいれば、会社を上手く運営でき、経営者を育てる機会も増やせる。」(石田社長)。同社はなるべく経験を積む機会を増やし全員に社長になるチャンスを与えることを宣言している。また、ソルテラホールディングスでは経営理念や方針、事業計画などが書かれた「経営計画書」を年度ごとに作成し、社員全員に配布、グループの全社員約160名が毎朝同じ頁を読んで意志の共有化を図っている。

スピード感を持って 100年、100億、100事業達成を目指す

循環型社会への取組みを進めるソルテラホールディングスは幾つかの大きな目標を掲げている。

1つは全てのサービスや商品にSDGsの付加価値を付け、お客様にサービスや商品と共に提供できる、SDGsコーディネーター企業にすること。



事務所の内装も刷新し、職場環境改善にも随時取り組んでいる

2つ目は「東京8」を国内のみならず海外市場でのフランチャイズ展開を進めること。

3つ目は、創業100年、売上高100億、グループ全体における100事業の達成だ。

創業100年については、祖業である太陽油化を起点にすれば折り返し地点は通過した。現在、グループ全体の売上高は約35億円で、100億円達成を目指して毎年、前期比115%の実現を目指している。この目標について石田社長は「私が引退する前には絶対達成させたい。そのためには全力で走ります。」とチャレンジ精神を大いに覗かせる。

企業概要

株式会社ソルテラホールディングス

<https://solterra-group.com/>

代表取締役社長：石田 太平

■設立：2020年1月

■事業内容：グループ戦略の立案、実行およびグループの経営管理

■本社：東京都板橋区三園 2-12-2

■電話番号：03-3938-0022

■取引店：板橋支店

